Part2　最新過去問研究編

このPart2では実践的な試験での解答法を学びます。2014年から2015年の2年分の京大の過去問を解くことで、試験時間内に合格点を取る方法を身につけましょう。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Mission
３０分で１８／３０点を突破せよ！

第六講　過去問実践演習　２０１４年理系第二問

次の文を読んで、後の問に答えよ。

嵐にゆれ動いている木や、波立っている海を見て、あの木のゆれ方はあまり良くないとか、波の形がなっていないとか批評する人はいない。同様に優れた作品は、作家の手つきが見えないままに、読者をのめり込ませる。傑作はつらなり合うものが動いて、吹く風に似た音をたてる。

創作という言い方があるが、作家は何もないところから何かを創り出すわけではない。自分の力で創り出すというよりは、思わず知らず、えたいの知れない力に押されてそうなってしまう時、その作品は比較的まともなものである。

また、べつの言い方をすれば、創作とは、何かを創り出すというよりは、そこにもともと埋まっているものを掘り出す作業なのだ。もともとそこにないものは、いくら一生懸命掘っても突き当たらないし、下手な掘り方をすれば、像の形が欠けたり壊れたりすることもある。

つまり、自分の掘り当てたい像はどこに埋まっているか、また、どのよ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Anatomy of Victory　本文分析

うな掘り方をすればよいのか、というようなことが、作家の作業なのだろう。

わたしはいつのころからか、文学は、生活の中にしか埋まっていないと思うようになった。(1)生活の中にかかる虹の橋づめに埋まっている金の壺がわたしの文学である。

恋人たちが輝く目とバラ色の頬でほほ笑むとき、彼らは虹の橋づめに立っているのだし、うずくまってすすり泣く幼児の足の下にも金の壺は埋まっている。怒る人、闘う人、不可思議な衝動にかられて立ちすくんでいる人、そうした人の背後には必ず虹の橋がかかっている。

この人間社会で、言いたいことを言えずに、口ごもって生きている人びとが、何かのときにふと洩(も)らしてしまう言葉は無数の水滴になり、太陽の光が当たると虹の橋になるのだ。

わたしは、生きているうちにめぐり会った人びとの呟(つぶや)いた言葉を拾い上げて、小説を書いているから、めぐり会った人びとはわたしの文学世界を築いてくれた恩人である。作品は自分の力で創り出すわけではないとは、そういうことだ。

自分を文学の専門家だと思い込んでいる人たちの言葉は、ほとんど、わたしの心を打たない。文学に限らず、どんな道でも同じだと思うが、その

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Mission
３０分で１８／３０点を突破せよ！

道で一級の人たちは、自分をその道の専門家だとは思っていない。一級の人は、自分のやっていることを、自分の人生だと思い、話をするときは、自分の人生の話をする。

　彼は、彼のまわりにうごめいているものをじっと見つめ、「自然」の中にひそんでいるものを自分自身の中に見つけようとする。

　芸術家は独創的であらねばならない、といった言い方があるが、これは浅薄に使われやすい言葉である。たとえば、昼間は眠って、夜目ざめて仕事するのを独創的だと思ったりする。それはただ、珍しい習性が、なんらかの理由でつけられてしまっただけの話である。この習性をこっけいで悲劇的だと思うのは芸術家の感性だが、独創的だと思う人は、芸術家の素材となるに適した人である。

　(2)芸術家にはこの種の独創性は必要ではない。必要なのは「自然」が内包する生命である。そこにある生命を掘り出すのが芸術家で、芸術家は生命を無から創り出すわけではない。

　わたしがまだ世間に作品を発表していないころ、そして、わたしが文学についてひと言も語らないころ、わたしを「自然」から何かを掘り出すことのできる人間として扱ってくれた二、三の友人がいたが、そういう人たちは真正の芸術家だった。つまり、彼らは、独自の作品世界ともいうべき

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Anatomy of Victory　本文分析

ものを持っていた。「自然」を映した彼らの生活そのものが芸術品だった。

彼らの人生にまつわる独特の表現の中には、それをそのままテープにとっておけば、立派な文学作品になるものがあった。そして、わたしは今でもそれらの話を思い出して、つづり合わせて小説を書いているに過ぎない。

作家として暮らし始めると、人びとの何げない言葉を聞く機会が少なくなったような気もしている。

小説に書いてもらいたくてする人の話や、書かれまいとして用心している人の話は、あまり面白くないのが普通である。

そういう話には、吹く風の音がない。また見上げても、決して虹はかかっていない。もちろん、金の壺も埋まっていない。　（大庭みな子「創作」）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　傍線部（1）はどのようなことを言っているのか、説明せよ。

問二　傍線部（2）はどのようなことを言っているのか、説明せよ。

問三　作者が本文中で用いる「自然」はどういうものか、芸術家との関係を踏まえ、説明せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

一

二

三

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第六講　過去問実践演習

２０１４年前期理系第二問　大庭みな子「創作」

要旨

創作とは何もないところから何かを作り出すわけではなく人間社会の生活の中にあるものを掘り出す作業である。また、芸術家には不自然な生活による独創性は必要ではない。専門家のように特殊なことをするのではなく、一般的な人生を独自の言葉で語るのが創作である。

解答（３０点）

問一　１０点

人間社会の生活の中で言いたいことを言えずに口ごもって生きている人びとが呟いた言葉に、作者が心を打たれ拾い上げることによって、文学が作られるということ。

解答ポイント

① ａ言いたいことを言えずに口ごもって生きている人びとが呟いた言葉に（２点）
　ｂ作者が心を打たれ拾い上げる（２点）
② 一般的生活の中で（３点）
③ 文学が作られる（３点）

問二　１０点

人間社会の日常生活から離れて珍しい生活を過ごし、自分の力だけで何もないところから何かを作り出そうとするような独創性は芸術家には必要ないということ。

解答ポイント

① ａ人間社会の日常生活から離れて（２点）
　ｂ珍しい生活を過ごし（２点）
② ａ自分の力だけで（２点）
　ｂ何もないところから何かを作り出そうとする（２点）
　ｃこのような独創性は芸術家には必要ない（２点）

問三　１０点

「自然」とは、人間の意図や人為を超えた世界のあり方で、芸術家は日常生活の中にあるその世界をじっと見つめ、自分自身の中にも見つけることではじめて創作することができる

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ものである。

解答ポイント

① 自分自身の中にも見つける（3点）
② a芸術家は日常生活の中にあるその世界をじっと見つめ（2点）
　b創作することができる（2点）
③ 人間の意図や人為を超えた世界のあり方（3点）

解説

問一　傍線部内容説明問題

傍線部のわかりにくい部分を詳しく、わかりやすく説明する問題である。傍線部を分析すると、①「生活の中にかかる虹の橋づめ」という比喩表現、②「埋まっている」という比喩表現、③「金の壺」という比喩表現がポイントであるとわかる。よって、このポイントを説明している部分を本文中に求める。

まず①「生活の中にかかる虹の橋づめ」であるが、第七段落に「この人間社会で、言いたいことを言えずに、口ごもって生きている人びとが、何かのときにふと洩らしてしまう言葉は無数の水滴になり、太陽の光が当たると虹の橋になるのだ」とあることから、「生活の中にかかる虹の橋づめ」とは「この人間社会で、言いたいことを言えずに、口ごもって生きている人びとが、何かのときにふと洩らしてしまう言葉」に「太陽の光（＝作家の目）」が当たり「拾い上げ」ると見えてくるものであると言える。

次に、②「埋まっている」であるが、第五段落一文目に「文学は、生活の中にしか埋まっていない」とあるように「一般的生活の中にある」状態である。そして、③「金の壺」であるが、第六段落一文目に「うずくまってすすり泣く幼児の足の下にも金の壺は埋まっている」とある。よって、「金の壺」とは、一般的な生活の中に埋まっていた「文学」であると考えられる。

以上のポイントをまとめて解答を構成するとよい。

問二　傍線部内容説明問題

傍線部のわかりにくい部分を詳しく、わかりやすく説明する問題である。傍線部を分析すると、①「この種の独創性」と②「必要ではない」という「否定」がポイントであるとわかる。よって、このポイントを説明している部分を本文中に求める。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

まず①「この種の独創性」であるが、第十一段落にある「独創性」の例をまとめなければならない。この例は「珍しい習性（＝生活）」の例であり、問一で捉えた創作の必要条件である「一般の生活」とは反対のものである。

また②「独創性」が「否定」されている文を求めると、第十二段落三文目に「芸術家は（創作に必要な）生命を無から創り出すわけではない」とある。

以上のポイントをまとめて解答を構成するとよい。

（この問題に関して「否定」で終わるのではなく、「何が必要なのか」を捉えて「肯定」の形で終わらなければならないという説明がされる場合がある。しかし、創作に必要な「自然」が内包する生命を説明する問題が問三に設定されているため、この問題は「独創性」を「否定」する説明に終始する方がよい。）

問三　筆者特有の用語を説明する問題

本文中に使われた筆者特有の用語をわかりやすく説明する問題である。「自然」という言葉が使われた文、及び「自然」の対義語として用いられている「独創性」を否定している文を本文中に求める。

まず、第十段落に、「彼は、彼のまわりにうごめいているものをじっと見つめ、『自然』の中にひそんでいるものを自分自身の中に見つけようとする」とある。ここから「自然」とは、①「自分の周りにあるもので、自分自身の中にもあるもの」だとわかる。

次に、第十三段落に「『自然』から何かを掘り出すことのできる人間」や「『自然』を映した彼らの生活そのものが芸術品」とあることから、「自然」とは②「芸術の源である日常の生活」であるとわかる。

最後に第十六段落に「小説に書いてもらいたくてする人の話や、書かれまいとして用心している人の話は、あまり面白くないのが普通である」とあることから、「自然」とは③「人間の意図や人為」の反対であることがわかる。

以上のポイントをまとめて解答するとよい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。